

ことばの差別撤廃運動

寺澤盾 (てらさわ・じゅん) は現代の英語の諸相を解説するなかで差別撤廃運動 (ポリティカル・コレクトネス) についてふれている。寺澤はポリティカル・コレクトネスについて、つぎのように説明している。

…米国では、1980年代以降、ポリティカル・コレクトネス (political correctness, 略PC) の名のもとに、これまで社会のなかで差別にさらされてきた人びとの権利や文化を尊重し、そうした人びとを傷つける言動を排除しようとする動きが顕著になっている。

現代社会にあるさまざまな差別のなかで、とくに注目されてきたのは、ableism (障害者差別)、racism (人種差別)、sexism (性差別) である。なお、-ismという接尾辞は、もともとPuritanism (清教主義)、Marxism (マルクス主義) など「主義、信条」を表す場合に使われたが、20世紀後半以降は、さまざまな差別や偏見をさす語を作り出している。

たとえば、ag(e)ismは「年齢による差別」をいうが、とくに老人に対する差別を意味する場合が多い。…後略… (てらさわ2008:168)

ポリティカル・コレクトネスについては、日本でも90年代に出版された本でも紹介されていた。たとえば『アメリカの差別問題—PC (政治的正義) 論争をふまえて』 (わきはま編訳1995)、『言葉は社会を変えられる』 (うさみ編1997) などがある。

障害者の呼称をめぐる

ここでは、障害者の呼称について、英語、日本語、朝鮮語の例を確認する。

寺澤は、「「手足の不自由な人」を表わす英語として、かつては cripple が用いられることが多かった」こと、「しかし、現在ではこの表現は、侮辱的なニュアンスがあるため避けられる傾向にある」と指摘している (てらさわ2008:169)。そして、「差別的ニュアンスの少ない婉曲表現として」、つぎの3つが使用されていると述べている。

- ・ the disabled (障害者)
- ・ the handicapped (障害者)
- ・ people with disabilities (障害を持った人びと) (同上)

そして、「より進んだPC表現として」つぎの3つもあることを指摘している。

- ・ physically different people (ほかの人と身体的な違いがある人びと)
- ・ differently abled (ほかの人とは異なる能力をもった)
- ・ physically challenged (身体面で挑戦を受けて〈立って〉いる、身体的困難に立ち向かっている) (同上)

ただ、じっさいには、アメリカ英語では「people with disabilities」、イギリス英語では「disabled people」という表現が一般的であるといえる。そして、それが障害学 (Disability Studies) のような、障害当事者が中心になって障害現象を研究する分野でも妥当な表現とされている。つまり、提案として、さまざまな呼称の案は登場するけれども、そのなかの一部が使用されつづけられるようになるということである。

たとえば、韓国では障害者を「チャンエイン (장애인=障碍人)」と表現する。この表現が定着するまえは「チャンエジャ (장애자=障碍者)」という表現も一般的だった。しかし、「者」という呼称は「者共 (ものども) の者 (しゃ)」だということから、チャンエイン (障碍人) がよしとされたのだった。障害者をめぐる呼称としては、障害当事者からむしろ批判をうけた婉曲表現もあった。「チャンエウ (장애우=障碍友)」という呼称である。これは、「障碍のあるお友

達」というようなニュアンスになってしまい、そもそも自称として使用することができないという問題があった。わたしが韓国にいた2002年から2004年までの間もチャンエウ（障害友）という呼称はトイレなどによく掲示されていたし、メディアでも多用されていた。現在でも、障害友権益問題研究所という民間団体がある。現在、チャンエウ（障害友）とハングルでウェブを検索すると、「障害人と障害友、どの呼称が適切なのか」という記事や、「チャンエウ（障害友）という呼称はやめてください」という記事が見つかる。当事者から批判があがるような婉曲表現をわざわざ使用する意味はないといえる。ただし、当事者の間でも、意見がわかれている場合もあるだろう。

障害の表記をめぐる

日本語は、敗戦後に文部省によって実施された漢字制限（当用漢字表）によって、漢字表記がかなり整理された経緯がある。たとえば「しょうがい」という語については、それ以前は障害、障礙、障害の3種類の表記が混在していた。漢字制限以後は、障害表記が定着した。この障害表記について、問題視する声がある。それは障害当事者からの意見もあるが、健常者が指摘している場合が多い。そして行政が「障がい」という表記を推進している例が多くある。これについて、むしろ障害当事者から批判する声もあがっている。

漢字表記をどうするかという議論は、音声にすれば同じであること、日本語点字ではすべて「しょーがい」になることを無視しているといえる。そして、視覚障害者など、合成音声による読み上げを日常的に利用している人からは、「障がい」と表記してあると「さわがい」と誤読されてしまう問題も指摘されている。「障害表記」問題は、日本語表記の現実をうつしだしているといえる。

Deaf と Hearing Impaired

寺澤は障害に関する呼称のうち「盲」や「ろう」という用語について、つぎのように説明している。

「目の不自由な人」、「聾啞の人」を表わす英語 blind, deaf, dumb も差別的と見なされることが多く、侮辱的ニュアンスの少ない表現の使用が奨励されている。blind に対しては、with seeing difficulties（視覚的困難をもつ）、visually impaired（視力の弱まった）など、deaf に対しては、with hearing difficulties（聴覚的困難をもつ）、hearing impaired（聴く力の弱まった）など、dumb に対しては、mute（口のきけない）などの婉曲表現が提案されている。ただし、blind, deaf, dumb という語に対する反応には、「温度差」があるようで、『ロングマン現代英英辞典』では dumb にのみ 'offensive' というレッテルが貼られている（てらさわ 2008:170）。

寺澤はどうか、ろう文化運動（Deaf Culture Movement）について知らないようである。ろう者は、大文字の頭文字で「Deaf」と表記し、自分たちのアイデンティティとしている。これは積極的な自称表現である。

1995年に発表された「ろう文化宣言」では、小文字の「deaf」と大文字の「Deaf」について、つぎのように説明している。

アメリカでは、ろう者の手話が言語として認められていく過程で、デフ・コミュニティー（deaf community：ろう者社会）を言語的少数者、文化的集団としてとらえる視点が生まれた。ろう者自身も、自分たちの言語と文化に対する自信と誇りを取り戻し、自分たちを障害者というよりは、むしろ言語的少数者として扱うよう社会に対して求め始めた。デフ・コミュニティーは、耳が聞こえないことによってではなく、言語（手話）と文化（deaf culture：ろう文化）を共有することによって成り立つ社会である。耳の聞こえない人びとすべてが手話を知っているわけではない。そこで、耳の聞こえない人一般から、デフ・コミュニティーのメンバーを特に区別することが必要になった。彼らのとった方法は実に簡潔で雄弁な方法であった。英語では、耳の聞こえない人のことを“deaf”というが、この頭文字を大文字にすることによってデフ・コミュニティーのメンバーを指すこととしたのである。“Deaf”——自信と誇りを取り戻したろう者が手に入れた新しい自分たちの呼び名は、ろう者とはある種の『民族』なのだ」と主張していた（きむら／いちだ2000:9）。…中略…

このような経緯をもつ用語を他者が「適正化」してしまうことは非常に問題であるといえる。「Deaf」という表記は、現在それなりに定着しているといえる。

この「Deaf」という表記は「ろう者」と訳すべきものである。しかし、これを日本語に訳すとき「聴覚障害者」としてしまふ例がよくある。現在では、ろう者と難聴者をならべて表現する場合には、「Deaf and Hard of Hearing」と表現することが一般的である。過渡期をへて、呼称は安定するのである。

盲 (blind) という表現についても、当事者が長年使用してきた自称であり、盲 (blind) という用語を使用した当事者団体はたくさんある。

問題なのは、「deaf and blind」という表現を比喩的に、だれかを「無能あつかい」するときに使用してきたことである（歌の歌詞など）。そのような不適切な使用があまりに多かったがゆえに、自称表現が差別的なもののように感じられるようになってしまったのである。現在、日本語では盲人という自称をする人もいる一方で、視覚障害者という用語を使用する当事者もいる。「見えない人、見えにくい人」という表現も定着しつつある。

ピープルファースト (People First) という運動

知的障害者の呼称は、アメリカ英語では「people with intellectual disabilities」、イギリス英語では「people with learning disabilities」である。以前は、「mental retardation」という語が一般的だった。この語の訳語として、日本語でも「精神遅滞」や「知恵おくれ」という用語が一般的に使用されていた。現在の英語でも、差別的な罵倒表現として「retard」という語が残っている。

さまざまなかたちで侮蔑されてきた知的障害者は、自分たちの権利のために当事者運動を展開してきた。なかでも有名なのが「ピープルファースト」という運動である。たとえば、「peoplefirst.org」というウェブサイトは、つぎのように説明している。

WHAT IS PEOPLE FIRST?

People First groups are often known as self-advocacy groups.

They are groups of people with learning difficulties, people with intellectual disabilities, people with developmental disabilities and/or people with disabilities who speak up for themselves and work to improve the lives of their members.

The People First movement started during the planning for a self-advocacy conference in 1974. This was held in Oregon in the the United States. Dennis Heath, a social worker who supported the group, said:

“One of the pioneer self-advocates – who it was is forgotten – objected to the constant use of the words “retarded” and “handicapped.” “I want to be treated like a person first,” he said. From that came the group’s name, People First of Oregon.”

From this first conference, the People First movement has spread to all corners of the world.

<https://www.peoplefirst.org>

つまり、ピープルファーストとは、「まずひとりの人として接してほしい」という趣旨であり、「われわれは障害者であるまえに人間だ」という宣言である。うへの英語は、わかりやすく表現されている。そのなかで一般になじみのない表現は「self-advocacy」だろう。自己権利擁護という意味である。自分の人生について、周囲（家族や支援者）に勝手に決められてきた経験をもつ知的障害者が自己決定権を主張し、自分たちが権利の主体として仲間と集まり、連帯し、社会にむけて声をあげる活動をしているのである。ピープルファーストの活動は、日本でもある（「ピープルファーストジャパン」 <https://www.pf-j.jp>）。ピープルファーストジャパンは、毎年、全国大会を開催している。2019年は大阪で11月29日、30日に開催される。

ピープルファーストの活動は、韓国や香港でも盛んである。ピープルファーストの活動のなかには、「わかりやすいことばで情報提供すること」がある。「easy read people first」でウェブを検索すると、英語圏でのとりくみが確認できる。そのほかの言語でのとりくみについては、第3回のプリント4ページで紹介してある (http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tagengo2019a_3.pdf)。

ポリティカル・コレクトネスをめぐる

ことばと差別の問題については、日本語では寿岳章子（じゅがく・あきこ）の『日本語と女』が1979年に出版されている。マイノリティの社会的地位や関係のありかたを是正するための議論は最近になってはじまったものではない。

英語のポリティカル・コレクトネスの議論も、大学という空間から舞台を拡大しながら社会的な関心事になっている。しかし、その構図は1990年代からそれほど変化していないようである。脇浜義明（わきはま・よしあき）はアメリカのポリティカル・コレクトネスの論争について「PC論争は反PC攻撃があって生まれたもの」としてしている（わきはま編訳1995:4）。脇浜はつぎのように説明している。

日本の同和教育を見ても分かるように、運動がある程度の力をもつと行政はそれに迎合的に反応する。その際肝心な点が抜け落ちて、…中略…PC的なものを制度化する傾向がある。いわゆるPC論争はここが出発点になっているように思う。大学が反差別側に立とうとしたとき保守派からの反撃が始まった。そのとき、運動側の内部批判の語彙であったPCを援用して、反差別運動全体を指す言葉として一般化したのである。…後略…（同上:6）

同じく1990年代に宇佐美まゆみ（うさみ・まゆみ）は言語変革の意義と必要性について、つぎのようにのべている。

…「言語というものは、それを使うことによって人間の思考の在り方にも影響を与え得る力を持っているのだ」ということである。すなわち、言葉は「単なる符号」ではないということである。それは、別の言葉で言えば、言語変革を行うことは、人々の意識改革をもたらす、ひいては社会変革にもつながる大きな力となり得るのだという考え方である。「まず、差別を生み出す社会構造自体を変えなければ、言葉の言い換えを行うだけでは問題の本質的解決にはならない」という言語変革に対する消極派、反動家たちの一見もっともらしい抽象論に対して、当然「言葉の言い換え」自体が目的なのではないということを明確にした上で、改めて、「逆に、差別を生み出す社会構造を変えるために、その一つの有力で堅実な手段として、言語の非差別化を行っていかねばならないのだ」ということを強調したいというのが、私の一貫した主張である（うさみ編1997:14）。

こうした議論から20年をへて、現在では「ポリコレ」「ポリコレ棒」など、ポリティカル・コレクトネスを批判的に表現する意見がウェブで流通している。そのような反動が見られるということは、それだけ社会的認知がすすんだということでもある。それは「ダイバーシティ（diversity）」という外来語を使用した議論が増加したことの結果であるといえる。つまり、ダイバーシティを推進する動きが社会の一方にはあり、それを問題視する側がもう一方にある。ダイバーシティの推進を批判する側は、それを「ポリコレ」だと非難するのである。

そもそも、ダイバーシティは「推進」するようなものではない。ただたんに、社会の現実である。社会の現実をふまえた社会政策をとるか、とらないかというだけのことである。社会の現実をふまえたメディア表現をするかどうかということである。多数派が社会で権力を持ち、自分たちだけの都合で社会をつくってきた結果として、多くの人にとって生活しにくい環境がつくられてきた。現在は、その過去を反省し、よりよい社会をつくらうとしている段階にある。それならば、多様な人に、意見をもとめる必要がある。多様な人に意見をもとめる際には、呼称の問題にも気づくことができる。「当事者」といっても一枚岩ではないことが確認できるだろう。

多様な人に意見をもとめるためには、多言語化も必要である。情報のバリアフリーも必要である。わかりやすいことも必要である。言語の問題は、社会問題の一部である。しかし、それなりに、おおきな問題である。

参考文献

あべ・やすし 2013 「「障がい」表記について。」 <https://hituzinosanpo.hatenablog.com/entry/20130115/1358198352>

あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院

宇佐美まゆみ（うさみ・まゆみ）編 1997 『言葉は社会を変えられる—21世紀の多文化共生社会に向けて』明石書店

小川喜道（おがわ・よしみち）／杉野昭博（すぎの・あきひろ）編 2014 『よくわかる障害学』ミネルヴァ書房

木村晴美（きむら・はるみ）／市田泰弘（いちだ・やすひろ） 2000 「ろう文化宣言」現代思想編集部編『ろう文化』青土社、8-17

佐藤裕（さとう・ゆたか） 2018 『新版 差別論—偏見理論批判』明石書店（初版は2005年）

寿岳章子（じゅがく・あきこ） 1979 『日本語と女』岩波新書

寺澤盾（てらさわ・じゅん） 2008 『英語の歴史』中公新書

師岡康子（もろおか・やすこ） 2013 『ヘイト・スピーチとは何か』岩波新書

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ） 1997 「多文化主義と表現のガイドライン」ゆあさ／たけだ編『多文化社会と表現の自由』明石書店、245-272

湯浅俊彦／竹田春子（たけだ・はるこ）編 1997 『多文化社会と表現の自由』明石書店

脇浜義明（わきはま・よしあき）編訳 1995 『アメリカの差別問題—PC（政治的正義）論争をふまえて』明石書店

学生のコメント

…授業で「障がい者」の表記について学びました。表記において、現在問題になっているのが障害の害をこの漢字のままでもいいのか？ 碍という本来の漢字、または、ひらがな表記にするべきではないかという意見があるそうです。ちなみに、中国と韓国では、「碍」を使って表記しています。害という漢字はマイナスの意味があるから障がい者に対する差別につながるから、このような意見があるそうですが、そのように思う人こそ、差別していると私は思ってしまいました…。日本同様漢字を扱う中国にも、このような表記問題はあるのでしょうか？

【あべのコメント：総称としての障害者は中国では「残疾人」といいます。個別の障害については「～障碍」という。台湾では「障礙者」「障礙」。障害者の呼称について漢語圏で議論となっている例は知りません。】

日本ローマ字社のサイトにあるローマ字表記の「を」が“wo”ではなく、“o”となっていた。気になって、訓令式のローマ字表を調べてみたら、「を」は“o”だった。「じ」などは（jiでなく、ziと表記しているの）発音を優先しているとは思えないが、なぜ「を」を発音を優先して訓令式ローマ字を作ったのか不思議に思う。…後略…

【あべのコメント：音韻論ってわかりますか？ 文字表記というのは、音声学的な観点ではなく、音韻論的な観点から構成するほうが合理的です。日本語話者にとって「たちつと」は一行にならんでいるのであって、た行のなかで「つ」だけは異質な発音だなどという「音声学的な観点」は文字表記には必要ないのです。だから、「ta、ti、tu、te、to」「za、zi、zu、ze、zo」と表記するのが合理的です。「ん」の発音も音声学的には3、4種類あるといえますが、日本語話者にとっては「ん」は「ん」であって、それ以上のもではない。だから「n」でじゅうぶんだというのが音韻表記です。現状の「ローマ字入力」が定着してしまったせいで、「を」を「wo」だとみなしてしまう人が多いですが、「ローマ字で日本語を書く」ということと、「ローマ字をつかって日本語を入力する」ということは別のことです。たとえば、ローマ字で日本語を書くとき、「学校」という語のローマ字表記は、あくまで「gakkō」か「gakkō」です。「gakkou」ではない。】

日本語のローマ字表記について。ひらがな表記にも言えることですが、同音異義語はどのように区別して書くのか疑問に思いました。…後略…

【あべのコメント：表記では区別できない。基本的には文脈で判断できる。判断しにくいなら、ちがう語をつかう。あるいは、説明をくわえる。それが原則です。点訳（墨字の文章を点字にすること）でも、あいまいな同音異義語にかぎっては、説明をいれます。ローマ字運動は「耳で聞いてわかることばをつかおう」という運動も同時に展開してきました。第3回のプリントを読みなおしてください。たとえばNHKは耳で聞いてわかるということを大事にしてきました。】

少し前に、外務省で国名表記に「ヴ」を使わないようにすると取り決めていたのを思い出しました。…後略…

文字表記の改革について、TEDを見て私もすぐにできるのか、今がその時なのか？ということ思い出しました。顔を合わせなくても多くの世界中の人々とSNSでつながれる現代に文字という媒体がなくなるということは非常にむずかしいと思います。でも海外セレブなどが識字問題についてカミングアウトしている様子などを見ると、識字能力だけでその人の印象を決めつけてしまうような社会には疑問を持ちます。

【あべのコメント：英語のつづり字改革が議論される論点のひとつとして、不規則なつづりがディスレクシア（読字障害）をふやしているのではないかという主張があります。影響はたしかにあるようですが、つづりが規則的な言語では読字障害がおきないかという、そんなことはありません。英語圏では読字障害がおきやすいけれども、その結果、社会の認知がすすんでいて、読字障害の人にも学習しやすい環境が整備されています。】

たしかに“si”と“shi”や“tu”と“tsu”の違いは何だろうと思っていた。“si”や“tu”はローマ字として習うが、“shi”や“tsu”は習っていない。…後略…

【あべのコメント：訓令式を学校で教育しているけれども、パスポートはヘボン式ローマ字が基本とされていて、官庁によってバラつきがありますね。パスポートも申請すれば訓令式にできますが、面倒なのでヘボン式（shi）にしています。わたしはふだんヘボン式ローマ字は使用しないのですが。】

最近よく話題になる「ら抜きことば」、以前は「日本語の乱れ」の象徴として扱われているイメージでしたが、いつだったか「『ら抜きことば』によって、可能と尊敬の形が差別できるようになる点においては合理的だ」という肯定的な意見を聞いてから印象が変わった気がします。この国語国文科に入り、「ことばの移り変わりにとやかくもの申すことはむしろナンセンスだ」というスタンスを得たのですが、今回のTEDの「観察し分類して体系化して、今の時代の需要に合った規則を作るべき」という意見を聞いて、昔のことばづかいに固執するのは詮ないことではあるけど、それでもこれからのよりよいことばづかいの為に昔や現在のことばを研究することが大切だと改めて感じました。

【あべのコメント：歴史を知らないと、ナンセンスなことをいってしまいがちなんですね。なんで高齢者はファンのことを「ファン」というのか、みたいな。むかしは「ファン」と書くのが一般的で、文字をみて「ファン」と発音していた人がたくさんいた。英語のできる一部の人だけ「ファン」といっていた。】

私はイタリアンレストランで働いているのだが、メニューの中に、「枝豆の窯焼き」というものがある。しかし、1ヶ月に1回くらい「えだまめのつぼやき」と読む人がいる。頼まれた商品を復しようする決まりなのだが、「えだまめのかまやき」と言い直すのが、間違いを指摘するみたいで、「えだまめですねー」と言ったりしている。あとは蛸（たこ）が読めなくて、その部分をとぼしている人も多い。見た目がよいという理由で漢字をつかっているのだと思うが、ひらがなやカタカナにしたらもっと頼みやすいメニューになるのではないのかなーと思った。

医療系の学校の友達が、レポートは手書きしかダメだと言われる、といていた。なぜかときいたら分からないと言われたが本当に意味が分からないと思う。いまだにそんなところがあるんだなあと思う。履歴書を手書きでかけという会社も字のきれいさは関係ないというが、そうなるとなぜ字をきれいにかくのか、なぜみんな習字をならうのかまで疑問に思ってしまう。

よく単語を書くときに「送りがないっけ？ これ？」と言って迷うことがあります（ex. 申し込み書？ 申込書？）。結局、調べてみると「どちらでもよい」という風に出てきて悩んで損した、と思うことがよくあります。日本人でさえ迷うのに、日本語を学びたての人にとって複雑さが増すのではないのでしょうか。ツイッターで「こにんちは。」というようにひらがなを入れかえても大体違和感なくよめてしまうという投稿がありました。多少文字の順番や文字の欠落があっても脳が修正して書いてあることを理解できてしまうのは興味深いです。

【あべのコメント：単語の頭と最後の字さえそのままであれば、そのあいだの文字をいれかえても読めるという話ですね。話題になって数年たちます。ノッティンガム大学の博士論文（1976年）の実験。「Can Our Brains Really Read Jumbled Words as Long as The First And Last Letters Are Correct?」という記事 (<https://www.sciencealert.com/word-jumble-meme-first-last-letters-cambridge-typoglycaemia>) や日本語ウィキペディア「タイポグリセミア」（Typoglycemia）が参考になります。】

墨字の日本語には正書法がないことについて、スマホで漢字変換をするとき、「おこなう」と打つと「行う」と「行なう」が出てきて、どちらが正しいのかと悩むことがあります。「行なう」も、スマホの漢字変換で出てくるのだから間違いではないのだろうと思うのですが、学校では「行う」という送りがなで習ったので、「行う」を選ぶようにしています。日本語では、漢字を使うも使わないも自由だけど、ひらがなばかりの文は軽んじられる傾向があると思いました。漢字を混じえた日本語の方に、権威を感じる人が多いように感じます。…後略…

【あべのコメント：おこなうについては、おこなったとかたちを漢字にするとき、「行った」としてしまおうと、「いった」とも読めてしまうという問題があります。文脈で判断できるわけですが、合成音声による読み上げでは誤読が生じる場合もあります。「方」という字も「ほう」だったり「かた」だったり。】

使う人たちが使いやすいように文字は変わっていくべきだと思うけど、使う人たちが様々だから難しいと思った。

漢字廃止についてですが、私にとっては、文章の中である一定の漢字が使われているほうが、圧倒的に読みやすい、理解しやすいです。なのでもし漢字が廃止されたら、相当苦勞するだろうなというのが正直な考えです。でも、そういった苦勞を今、「漢字」のせいでしている人もいますよね。文字の自由のおとしどころって本当に難しそうです。「漢字を使わなくても“言語レベルが低い”とみなされない」という意識＝漢字を使わない自由の保障ということでしょうか？結局漢字を書く／書かない、読む／読まないというのは、日本語レベルの高い／低いとして扱われがちな気がしたので…

映像で見た、スペルを当てるチャレンジ、自分では絶対にできないと思いました。というのも、今日フランス語を習っている時にリスニングで出てきた“reproche”という単語がどうしても“poche”にしか聞こえず、先生との意思疎通ができなかったからです。フランス語で“r”はのどを鳴らすような、空気を抜くような発音をするので、どうしても聞き取りづらいくことが多いです…。

私の一緒に暮らす祖父母は私が知らない漢字を使って書くことがある。その度に私はその漢字は（もう）使われていないよ、と何も考えずに指摘していたが、あれは旧漢字だったと思う。祖父母が生まれ育ってきて使ってきた文字なのだから、ただ指摘するのではなく、まちがいと思わず、もっとその漢字のことを聞いたりして学べばよかった、と思う。文字が正しい、まちがい、にこだわる自分が良くないな、と思った。話してることは変わらないのに文字表記が変わる意味について考えようと思う。

高校の「現代文」で『舞姫』を学習しました。教科書の表記は旧字旧仮名でした。時代的には現代だとは思いますが、「古文」ではないかと思いつつ授業を受けていた記憶があります。「日本」を「にっぽん」と読むか「にほん」と読むか難しいところだと思いました。大辞泉や明鏡国語辞典（どちらも電子辞書内のもの）では、「にっぽん」で調べると「にほん」のところにとぶようになっていました。NHKでは「にっぽん」が主に使われているようです。しかし「日本語」や「日本庭園」は「にほんご」「にほんていえん」と読み、「にっぽんご」「にっぽんていえん」と読むと違和感があります。…後略…

…日本語の書き言葉が昔に比べて簡単になったのは確かにそう思いますが、「崎」「● [崎の大き立]」「高」「高」の違いが理解できません。読み方も同じですし、正直存在価値のないのではないかと感じてしまいます。使うのは名前のときくらいですよ。これら分かりにくくて苦手です。

【あべのコメント：戸籍では、手書きの表記が登録されています。その字が異体字であっても、それを正式だと本人が主張する場合は尊重されるということです。結果、たとえば「渡辺」という名前の漢字表記には、かなりのバリエーションがあります。京都に漢字ミュージアムというのがあります。漢検が見つけた博物館。2018年に「異体字の世界”ワタナベ”」というのをやっていたようです (https://www.kanjimuseum.kyoto/news/post_73.html)。参考になるのは「人名用漢字・異体字の歴史とは？【法律・戸籍制度における「正字」の変遷】」という記事です (<https://www.jmedj.co.jp/journal/paper/detail.php?id=3860>)。この記事を書いている安岡孝一（やすおか・こういち）さんは『新しい常用漢字と人名用漢字—漢字制限の歴史』という本も書いています。／不毛なことですが、人名というアイデンティティにかかわることなので、利便性は度外視して、たくさんの種類の「わたなべ」表記が今後も使用されつづけるのでしょうか。】

「正書法のない言語」は日本語以外にもあるのでしょうか？…後略…

【あべのコメント：書きことばがかなり定着している言語で正書法がない言語はめずらしいでしょう。書きことばとしてそれほど流通していない言語であれば、同じ語を書くのに複数の選択肢があるという状態はよくあるでしょう。また、いわゆる「表記のユレ」というレベルなら、多くの言語でそういった現象はあるでしょう。】

言語政策という程の規模ではありませんが、最近脅威に感じている言葉の変化があります。「出会い系アプリ」→「マッチングアプリ」（直訳ではないですが）漢字からカタカナへの表記の変化により、若干洗練された印象を受けます。それから、「利用者側から出会いを求める」から「運営者側が出会いを提供する」という風に、文字から受ける印象（≒意味）も変化しているように思います。これらの文字の変化から、この手のアプリを利用する際に発生するリスクが見えにくくなっているように感じるのです。とても個人的な意見ですが…。この変化の主体が誰なのかは分かりませんが、人為を感じる事例でした。

ハングルは人が考えたもので、比較的簡単だときいたことがあるのですが、韓国でもことばの運動はあるのでしょうか？…後略…

【あべのコメント：あらゆる文字は「人が考えたもの」ですが…。近現代、いろいろあります。縦書きから横書きへという移行、ハングル専用文の普及、日本語語彙の払拭、外来語の使用に関する制限、差別的語彙に関する批判など。ハングルという文字は合理的に考案されていますが、朝鮮語の発音はたとえば日本語とくらべて母音もたくさんあり、子音でおわる語もたくさんあり、前後の音に影響されて発音変化することもあるので、発音が複雑な分だけ、それなりに表記も複雑になります。漢字語彙は語源を意識した表記になっているので、発音通りに書けば正解とはかぎらない。】

TEDの「hを正しく使えるか、bを誤って…」のくだりは、日本語でいうところの助詞「は」「へ」みたいな感覚なのかなと思いました。第二言語でスペイン語を学びましたが、発音しなくてもhは書かないといけない単語があるのが大変だと思っていました。それは非母語話者の感覚だと思っていましたが、必ずしもそうとは限らないということが分かりました。小学3～4年？くらいのときに、漢字かなまじり文とひらがなだけの文をくらべてみるという内容を国語でやったおぼえがあります。あえて句読点が入っておらず（「今日は私が本を読んだ」と「きょうはわたしがほんをよんだ」みたいな）ほら、漢字まじりのほうが読みやすいでしょ？という感じだったのですが、今考えるとちょっとせこかったなと思います。わかち書きにするとか、どうすれば読みやすくなるかの正解が、漢字まじりにする、しかなかったのが気になりました。

【あべのコメント：なれの問題なんだということを確認する方法として、カタカナとひらがなを反転してみるといいです。漢字の部分はそのままにして、ひらがなの部分をカタカナにしてみるだけで、読みやすさはおおきく変化します。】

WordやiPhoneの機能もそうだが、自動的にスペルミスや文書内の同じ単語のゆれなどを指摘してくれるのは確かに便利ではあるのだが、それを意図して、わざとゆれを出したい場合や、コンピューターが予測していたこととは違う文字を打ちたい時、少し混乱してしまうことがある。特に、第二言語でフランス語を学んでいた時、iPhoneのネット検索でフランス語の単語をアルファベットで打って検索しようとするといPhoneの検索予測でフランス語に似ている英語のスペルがでてきてしまい、AIが勝手に判断して正しい、私が調べたいフランス語が英語に変換されてしまい検索がめんどくさくなる時があった。…後略…

【あべのコメント：検索については、iPhoneというよりはグーグル検索の仕様ですかね。そういう場合はフランス語のグーグルを検索するといいいですよ。わたしも日本語グーグルで中国語のフレーズとかをしらべていると、日本語の単語ばかりでてきてしまうことがあります。】

レポートについて注意すること

- ・引用・参照したものは、出典をすべて明記すること。明記していないものは剽窃（ひょうせつ）と見なし、不可とする。
- ・本や論文の書誌情報について、標準的な表記をすること。
 - ◆単行本：著者名、出版年、題、出版社 / 論文集：著者名、出版年、章題、編者名、本題、出版社、掲載ページ
 - ◆著者名、出版年、題、雑誌名、巻号、掲載ページ
 - ◆論文は上記のように書くのであって、その論文がアクセスできるURLだけを書いてダメ。URLは必要ない。
- ・ウェブの記事は、著者名、題、掲載年、URLなど、わかる範囲で。
- ・自分の文章と他人の文章を混在させないこと。読者がはっきりと区別できる文章にすること。
- ・以上の点について不明なことは、レポートの入門書をしっかり読むこと。
- ・これまでのプリントですでに指示したことについても注意すること。